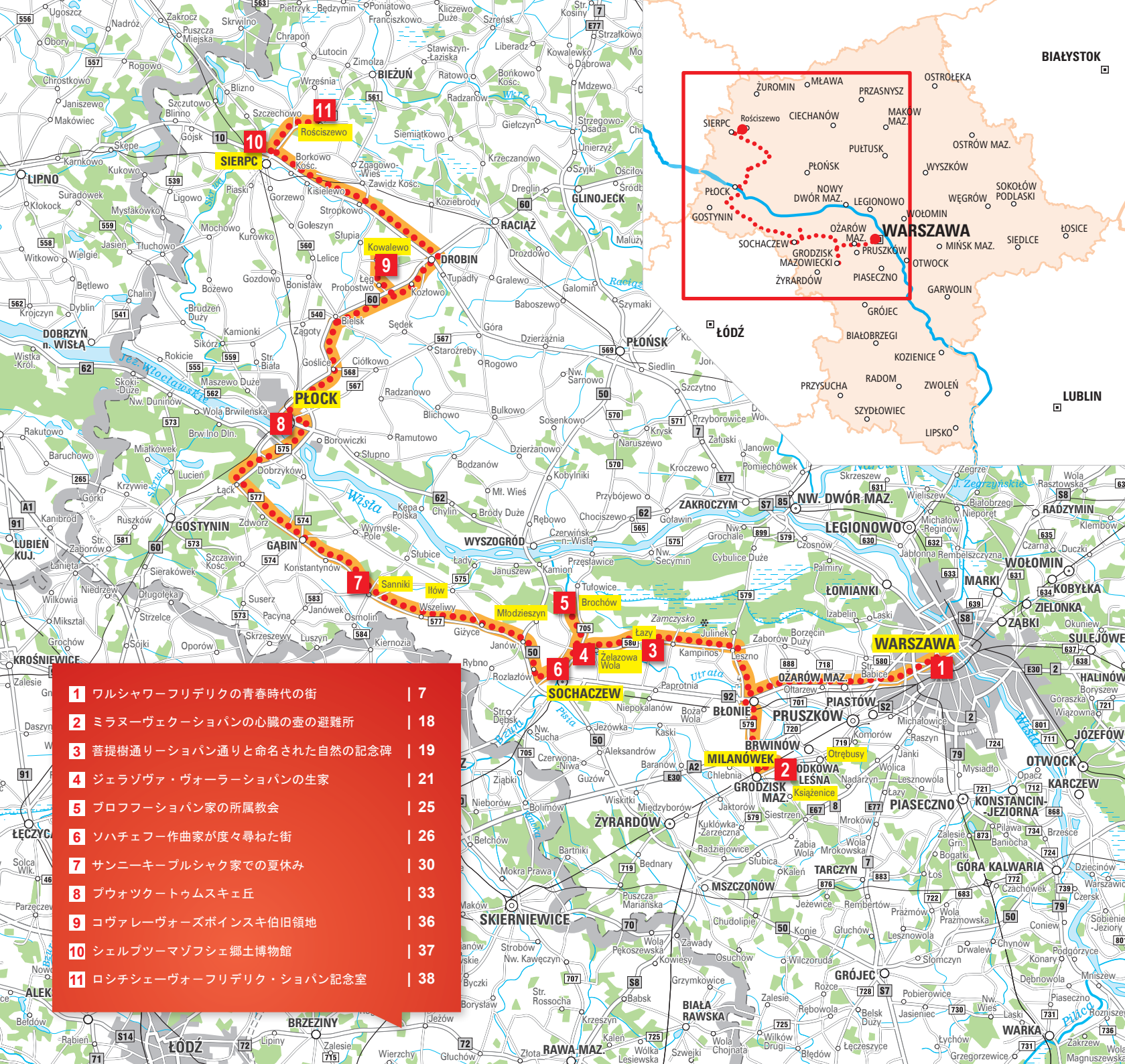
CHOPIN ROUTE
MROT
TOURISM ORGANISATION OF THE MAZOVIA REGION
観光ガイドブック
ショパンロード
Mazovia.
heart of Poland



1 ワルシャワーフリデリクの青春時代の街 | 7
2 ミラヌーヴェクーショパンの心臓の壺の避難所 | 18
3 菩提樹通りーショパン通りと命名された自然の記念碑 | 19
4 ジェラゾヴァ・ヴォーラーショパンの生家 | 21
5 ブロフフーショパン家の所属教会 | 25
6 ソハチェフー作曲家が度々尋ねた街 | 26
7 サンニーキープルシャク家での夏休み | 30
8 プウォツクートゥムスキェ丘 | 33
9 コヴァレーヴォーズボインスキ伯旧領地 | 36
10 シェルプツーマゾフシェ郷土博物館 | 37
11 ロシチシェーヴォーフリデリク・ショパン記念室 | 38

マゾフシェ現在はポーランドの中心であるが、300年以上に渡って共和国が形成された時期には独立した公国として存在していた。この地方の中心部ではワルシャワが大都市のリズムを脈打ち、その周りにはまだ開発の余地を残す土地が広がっている。従来、映画界の注目を集めている神秘的な城や宮殿、文化遺産の教会や魅力的な街、かつての戦場平原や景色が旅行者を待ち受けている。この全領域は歴史や文化や自然の宝庫だ。その境界線に立って　「開け、マゾフシェ」と呪文を唱えさえすれば、入り込んで選んだ道を進んで行けばいい。

さあ、これが**ショパンロード**-産業革命以前のマゾフシェと、古典派がロマン派に傾倒し始める19世紀初めのワルシャワへの旅だ。少年時代の作曲家の跡を一歩一歩辿っていくと、ダイナミックな発展を展開していた200年前の街を想像することができるー美しい古典建築、賑やかな喫茶店、文化生活が繰り広げられた劇場や貴族社会のサロンと共に。トレンバツカ通りとクラクフ郊外通りの角も賑わっており、この駅馬車停留所から各地に馬車が旅立っていった。ここから幼少のフリデリクは故郷のジェラゾヴァ・ヴォーラに出発していた。今日ジェラゾヴァ・ヴォーラでは貴族の館の中から流れるショパンの音楽を聴くことができる。そして若いショパンの才能に惚れ込んでいた将軍と共演したことのあるソハチェフへも、1810年にショパン夫妻の息子が洗礼を受けた、珍しい要塞聖堂で有名なブロフフへもここから出発した。そして20歳の作曲家は時間と空間の境界線を超えた栄光への旅の始まりに、ウィーンに向かってここを後にした。

ショパンロードは3つの新しい観光ルートのうちの1つで、これによってマゾフシェの遺産を発見することができる。他のルートも一見に値する。マゾフシェ公ロードは、中世のお城や勇敢な騎士や独立公国としてのマゾフシェを三世紀に渡って支配した賢明で気概のある支配者たちの国への旅だ。1920年のワルシャワの戦いロードは、ほぼ100年前の戦争がなぜヨーロッパ史で最も重要な戦いの一つとみなされているのか理解することができる、時間と空間の旅だ。

これらの観光ルートの詳細はホームページで www.dziedzictwomazowsza.pl

フリデリク・ショパンの生涯ー
年表

1810

3月1日、ジェラゾヴァ・ヴォーラにてフリデリク・ショパン誕生。秋、ショパン一家はワルシャワに移住。

1823ー1825

自宅で学習していたフリデリクはワルシャワ高等学校の4年生に編入。1824年と1825年の夏休みにはドブジン地方にあるシャファルニアで過ごした。

1826ー1827

ショパンはワルシャワ大学付属音楽大学に入学し、ユーゼフ・エルスナーに作曲を師事。夏にはドゥシュニーキ保養地に滞在。1827年ショパン家末娘のエミリアの死後、一家はクラクフ郊外通りにあるクラシンスキ宮殿に引っ越した。同年フリデリクはモーツァルト作曲「ドン・ジョバンニ」のアリアをテーマにしたラ・チ・ダレム　変奏曲ロ長調op. 2やソナタハ短調op. 4という本格的な作品を初めて作曲した。夏にはグダニスクに向かって旅行した。

1830

3月に国立劇場で開かれた2回のコンサートでは、若いショパンは協奏曲ヘ短調とポーランドの主題によるファンタジーイ長調などの自作も演奏し、聴衆に熱狂的に受け入れられた。夏にはフリデリクは故郷から離れる準備を始め、ポトゥージンを訪ね、数日ジェラゾヴァ・ヴォーラで過ごした。家族や友人と別れを告げ、11月2日にワルシャワを後にし、もう2度と戻ることはなかった。

1815ー1818

フリデリクはヴォイチェフ・ジヴニにピアノを習い始めた。1817年にはショパンの処女作-ポロネーズト短調が出版された。1818年、幼いピアニストは初めて公の場で演奏し、大きな反響を呼び起こし見事なデビューを果たした。「ワルシャワジャーナル」という当時の科学文学誌には「正真正銘の音楽の天才だ。ピアノ曲の中でも超難曲である作品を軽々と見事に味わい深い演奏で弾きこなしているだけでなく、専門家が大絶賛するほどの舞踊曲や変奏曲をすでに作曲している。」と記録されている。

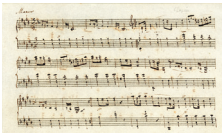
1828ー1829

フリデリクはサンニーキのプルシャク家で1828年の夏休みを過ごした。9月の小旅行中にはベルリンの音楽界を垣間見た。1829年には「ショパン・フリデリクー際立った才能、音楽の天才」というユーゼフ・エルスネルの評価を得て大学を卒業した。夏にはウィーンを訪れ、ヨーロッパ音楽界に大成功のデビューを飾った。秋にはストゥシジェフの代母アンナ・ヴィエショウォフスカとアントーニンのラジヴィウ公爵一家を訪ねた。

1831－1832

1831年の8ヶ月間ショパンはウィーンで過ごした。シュトゥットガルトでは十一月蜂起失敗の知らせを受け落胆した。秋にはのち永住の地となったパリに到着した。1832年2月にはプレイエルホールのコンサートで演奏し、地元ピアニスト全員の息の根を止め、パリ全体が呆気にとられた。」と報道された。この演奏会のおかげで音楽界に存在感を示し、篤実なピアノ教師となった。

1833－1834



仕事に明け暮れる日々。コンサートやピアノのレッスン、作曲とショパンは充実した生活を送った。1833年の夏はル・コトーで過ごし、ブリュッセルとリールにも訪れた。1834年にはメンデルスゾーンやリスト、ヒラーやベルリオーズと知り合いになる。アーヘン、デュッセルドルフ、ケルン、コブレンツなどを観光した。

1835

カルロヴィ・ヴァリで両親と再会後、ジェチーンや当時ドレスデンに滞在していたスージェーヴォ出身のヴォジンスキー家を訪ね、その訪問は年若いマリア・ヴォジンスカとの婚約につながった。さらにライプツィヒやフランクフルト、ハイデルベルク、そしてストラスブールにも立ち寄った。

1836－1837

フリデリクは夏にマリーエンバートのヴォジンスキ家を訪ねた後ドレスデン、ライプツィヒ、カッセル、フランクフルトに向かった。ジョルジュ・サンドとの出会い。作曲に専念する時間が多くなる。1837年にはピアノ製作工場の社長であるカミーユ・プレイエルと急に思い立ってロンドンに旅行した。8月にマリアとの婚約は解消された。

1838－1843

ジョルジュ・サンドとの交際の始まり。秋、ショパンはサンドの子供たちと共にマヨルカへ向かった。1839年は劣悪な健康状態にも関わらず、多数作曲した。夏はジョルジュ・サンドの館のあるノアンで過ごした。1840年は意欲的に働き、パリでの社交界に積極的に参加した。その後もパリとノアンの間を行き来しながら精力的に仕事し、数多くの作品を残した。

1844－1846

フリデリクの体調は極めて不良であった。1844年5月3日に父ミコワイ・ショパンが逝去。1845年はパリで忙しく仕事し、夏はノアンで過ごした。ジョルジュ・サンドと初めて確執が生じた。1846年にはホテルランバートに集まるポーランド亡命者との交流を新たに深めた。

1847－1848

ジョルジュ・サンドとの軋轢は激化し、遂に訣別に至った。1848年、ショパンは病気に苦しみながら、イギリスとスコットランドで7か月にわたって演奏活動を続けた。11月16日にロンドンのギルドホールで演奏したのが、彼の人生最後の公開コンサートとなった。衰弱してパリに戻った。

1849

病魔に冒されたショパンは友人たちの訪問やレッスンを制限しなければならなかった。姉のルドヴィカに手紙を書いた。「もしできることなら来てください。弱り切っています。どんなお医者さんもお姉さんたちのように助けてくれないでしょう。（…）今日はとてもいい天気で、居間に腰かけてここから見えるパリの眺めにうっとりしています。」絶え間ない医者の診察の甲斐もなく、あいにく健康状態は快復しなかった。死期を察した作曲家は出版物の整理や最も親しい人たちにお別れを告げた。10月17日永眠。

父ーミコワイ・ショパン

（1771年4月15日マランヴィルー1844年5月3日ワルシャワ）

ミコワイはフランスのロレーヌ地方の田舎で生まれ、彼の家族はポーランド人であるミハウ・ヤン・パツの領地に住んでいた。同じくポーランド人で、管財人のアダム・ヴェイドリッヒは頭のいい少年に興味を示し、城での手伝いに雇った。ヴェイドリッヒ家が1787年にワルシャワへ移住する際、10代の少年を同行した。ミコワイは一般教養を身につけており、外国語の基礎も音楽的才能もあった。フルートとヴァイオリンを嗜んだ。ワルシャワに移住後は寄宿制女学校で働き、後には教師として多くの貴族に雇われた。ジェラゾヴァ・ヴォーラのスカルベク伯爵家で働いたのが、家庭教師として最後の仕事となった。そこでユスティナ・クシジャノフスカと知り合い、1806年に結婚した。1810年にワルシャワ高等学校のフランス語教師としての職を得、一家はワルシャワに引越し、そこで永住することになった。高校での仕事以外にも寄宿制男子校を経営し、間もなく高く評価されるようになった。

François Chopin
(1738–1814)

Marguerite Delfin
(1736–1794)

Mikołaj Chopin
(1771–1844)

母ーユスティーナ・ショパン 旧姓クシジャノフスカ

（1782年11月14日ドゥーギェー1861年10月1日ワルシャワ）

没落貴族出身。父ヤクプ・クシジャノフスキはイズビーツァのスカルベク伯爵の管財人で、ユスティーナはイズビーツァで育った。ジェラゾヴァ・ヴォーラに住み込んでルドヴィカ・スカルベク伯爵夫人の財産管理と家事の手伝いをするために、1800年から1805年の間に故郷を離れた。そしておそらくここで家庭教師のミコワイ・ショパンと知り合い、1806年に近くのブロフフ教会で結婚式を挙げた。1807年には長女ルドヴィカが、その3年後にフリデリクが生まれた。1810年、ミコワイ・ショパンがワルシャワ高等学校の教鞭をとることになり、一家はワルシャワに引っ越した。そこで次女イザベラ（1811）と末娘のエミリア（1812）が生まれた。ユスティーナは4人の育児以外にも、夫婦で自営していた貴族の子息のための寄宿学校の所帯を賄っていた。ユスティーナとミコワイは次女イザベラと夫のアントニ・バルチンスキの家（現住所：ul. Nowy Świat 47）で余生を送った。

Ludwika Chopin
(1807–1855)

Fryderyk Chopin
(1810–1849)

Józef Kalasanty Jędrzejewicz – 夫
(1803–1853)

Henryk Bronisław Jędrzejewicz
(1833–1899)

Ludwika Magdalena Jędrzejewicz
(1835–1890)

Ludwik Ciechomski – 夫
(約 1827–1882)

Jacques Jędrzejewicz
(1887–1918)

Józefa Ciechomska
(1859–1922)

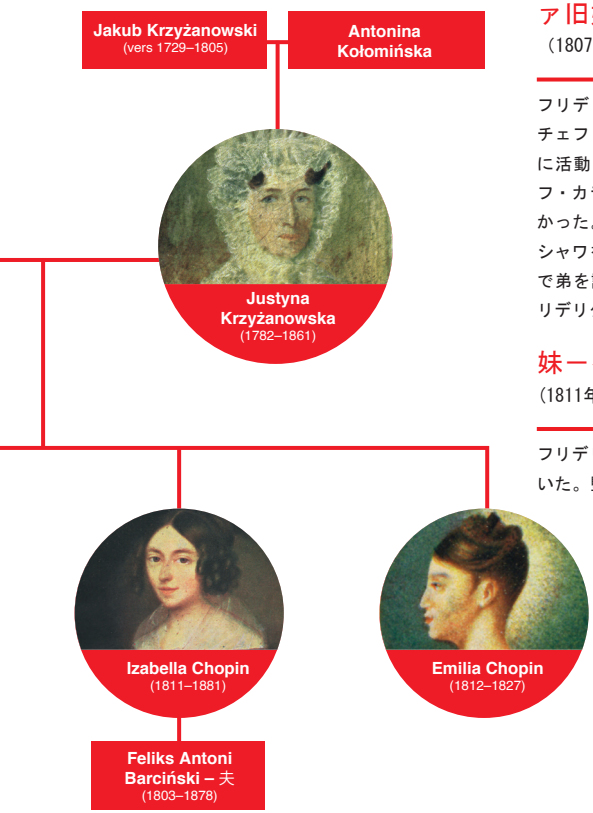
Laura Ciechomska
(1862–1939)

Ludwik Ciechomski
(1863–1913)

Mateusz Ciechomski
(1866–1918)

F. ショパンの家族の肖像画（エミリアを除く）ー紛失したA. ミエロシェフスキ画(1829)の複製画(1930)エミリアの肖像画ー作者不詳のミニアチュール

フリデリク・ショパンの家族



姉ールドヴィカ・イェンジェヴィチョーヴァ旧姓ショパン

（1807年4月6日ワルシャワ－1855年10月29日ワルシャワ）

フリデリク・ショパンの姉は寄宿女学校で勉強し、音楽はヴォイチェフ・ジヴニに習った。11月蜂起陥落後は愛国者協会で積極的に活動した。1832年にブロフフでワルシャワの弁護士のユーゼフ・カラサンティ・イェンジェヴィチュと結婚し、4人の子供を授かった。幼いころから弟と大変仲が良かった。フリデリクがワルシャワを離れてからは、彼と彼の友人と交信していた。2回パリまで弟を訪ね、臨終にも立ち会った。1850年1月、遺言に従ってフリデリク・ショパンの心臓をワルシャワまで内密に持ち帰った。

妹ーイザベラ・バルチンスカ旧姓ショパン

（1811年7月9日ワルシャワ－1881年6月3日ワルシャワ）

フリデリクの年子の妹は4人の兄弟姉妹の中で一番健康に恵まれていた。堅実に一般教養を身につけた。ルドヴィカやフリデリクに倣い、ヴォイチェフ・ジヴニにピアノを習った。11月蜂起陥落後は愛国活動や孤児や貧しい人々のための慈善事業に携わった。後に数学教授となったフェリクス・アントニ・バルチンスキとはショパン家の寄宿学校で出会い、1834年にワルシャワで結婚した。子供には恵まれなかった。両親であるミコワイ・ユスティナ・ショパン夫妻は余生をイザベラのもとで過ごした。

妹ーエミリア・ショパン

1812年11月9日ワルシャワ－1827年4月10日ワルシャワ）

フリデリクの末妹は身体が弱かったためか、まずは誕生後すぐに自宅で洗礼を受け、1815年にようやく教会で洗礼式が行われた。大変才能に溢れ、可憐でユーモアのある少女だった。エミリアはよく詩や戯曲を書き、家族はそれに魅了されていた。結核に対する様々な治療や闘病生活もかなわず、エミリアは15歳の若さで亡くなった。家族愛に溢れ仲の良いショパン一家にとっては悲惨な出来事であった。当時10代の残された3人の兄姉の感性も無傷で済まなかった。

家系図は
P. ミスワコフスキ・
A. シコルスキ共著「フリデリク
ショパン。家系」（国立フリデリク・ショパン研究所、ワルシャワ、2010年発行）をもとに、フリデリクの両親と姉妹を中心に作成された。ミコワイ・ショパンの子孫が現存することは
やはり記憶に留めておいた方がよいだろう。
ルドヴィカの子孫に当たるチェホムスキ家のユーゼファ、マテウシュ、およびアントニが生存している。

ショパンのワルシャワを散策

散策はサスキ公園から始めよう。無名戦士の墓は、ショパン一家のワルシャワでの居住地のうちの一つであったサスキ宮殿1の唯一の形跡である。その近くのザヘンタ国立芸術ギャラリーの裏にあるマワホフスキ広場には、三位一体アウクスブルク福音教会2が建っている。クルレフスカ通りをクラクフ郊外通りに向かっていくと、真正面のヴィズィテク教会3に行き当たる。右に曲がるとボレスワフ・プルス書店4のそばを通っていく。通り過ぎてすぐ右手のチャープスキ宮殿5内に美術アカデミーがあり、その向かいにはカジミエシュ宮殿6とワルシャワ大学のキャンパスがある。道すがら宮殿裏にある植物園こと土手の公園に立ち寄る価値はある。クラクフ郊外通りにはオボージナ通り7を通って戻り、聖十字架教会8見学後、スタシーツァ宮殿9に行くとよいだろう。ここからはタムカ通り10に面するショパン博物館までそう遠くない。散策の最終区間は新世界通りから三十字架広場11を抜け、ベルヴェデル宮殿13のあるワジェンキ公園12まで続く。

ワジェンキ公園

フリデリク・ショパンのワルシャワ

ワルシャワは20年に渡ってフリデリク・ショパンの住いであった。これは作曲家にとって、短すぎたがとても濃い人生の半分に当たる。
1810年の秋、ショパン一家はジェラゾヴァ・ヴォーラからワルシャワ公国の首都に移住した。1830年11月2日、弱冠にしてすでに教養を備えた芸術家は、ポーランド立憲王国の首都を離れた。国家の名称と国際的な支配の変移はワルシャワに悪影響を与えなかった。逆にその時期に街は急激に発展した。ワルシャワ大学や工科大学の前身にあたる工科協会も創立され、素晴らしい図書館を併設した科学友好協会や初等学校、専門学校も運営され、フリデリクの父が教鞭をとっていたワルシャワ高等学校では文化的社交生活が開花していた。
若いピアニストのワルシャワでの生活圏はクラクフ郊外（クラコフスキエ・プシェドミエシチェ）通りとミオドーヴァ通り周辺に集中した。この辺りにショパン家の住居や子供たちの通っていた学校があり、喫茶店、図書館、劇場、そして街で最も豊富に楽譜が揃いショパンの初版も販売していたブジェジーナ書店もここにあった。
フリデリクは幼少の時からピアノをヴォイチェフ・ジヴニに習い、その後音楽学校でユーゼフ・エルスネル教授に作曲を師事した。一般教養はワルシャワ高等学校で身につけ、その後も大学で勉強した。
とても幼いころから公演し始めた。フリデリク・ショパンの公式デビューコンサートは1818年であった。1830年までワルシャワの社交界で定期的に演奏し、故郷を離れる前には国立劇場で3回演奏会が開かれた。
聴衆としても他の芸術家の演奏会にも頻繁に足を運び、とりわけオペラは大好きでコンスタントに通っていた。ほぼ毎日、芸術やファッションや政治について喫茶店で熱く語り合っていた。
高校や大学、外国語の授業中や父の経営する寄宿校で、同年代の友達と知り合い友情を深めた。友達と街歩きし、夏には友人と一緒にワルシャワから遠出した。初恋も経験ーワルシャワ音楽院の学生のコンスタンツィア・グワトゥコフスカに恋焦がれた。
これらの場所はロイヤルロードと重なる部分が多いが、ショパンロードとしても標示されている。ショパンのワルシャワ生活で重要な場所は、ズィグムント記念碑から三十字架広場まで散在している。このルートを辿っていると、ほぼ2世紀前にフリデリク・ショパンもこの道を歩いていたと確信することができる。

www.warsawtour.pl
ワルシャワ 観光案内所：文化科学宮殿（入り口はul. Emilii Plater（エミリア・プラテル通り）から）旧市街広場Rynek Starego Miasta 19/21/21aショパン空港Aターミナル2番出口

ショパン家のワルシャワでの居住地

1810年秋、フリデリクが生後数ヶ月の時、ショパン一家はジェラゾヴァ・ヴォーラからワルシャワに引越した。クラクフ郊外通り（登記番号411）のジャン・ベーム宅にひとまず身を寄せたと言われている。この建物の跡地には現在ボレスワフ・プルス科学大書店のあるカミエニーツァ（中世からの石造りのテネメントハウス）7番が建っている。

ミコワイ・ショパンはワルシャワ高等学校に教職と教員住宅を与えられた。一家の住まいは学校と同じ**サスキ宮殿**内で、右翼棟の3階部分にあったらしい。次のショパン一家の住居はクラクフ郊外通り（登記番号413）だった

無名戦士の墓は唯一の
サスキ宮殿アーケードの形跡である。

ワルシャワ大学学長館ーこの建物内にフリデリク・ショパンは1817年から1827年の間住んでいた。

が、1944年12月にドイツ軍によって破壊されたため現存しない。**サスキ宮**殿のうちわずかに残っているのはアーケードの一部で、無名戦士の墓として現存する。

1817年3月にはワルシャワ高等学校が大学のキャンパス内にあるカジミエシュ宮殿に移転された。同じ建物に高等学校の教員も居住していた。ショパン家の住居は大学の正面門から右手にある別棟の3階部分にあった。

1827年にフリデリクの末妹のエミリアが亡くなった後、ショパン一家はクラクフ郊外通り（登記番号410、現住所5番）の**チャープスキ宮殿**の賃貸住宅に移った。フリデリクは初めて個室を与えてもらった。小さな屋根裏部屋には必要最低限の家具

ショパンのベンチ

フリデリク・ショパン生誕200周年を記念して、ワルシャワには15か所のショパンゆかりの場所をつなぐ散策コースが開設された。それぞれの場所に、ボタンを押すとショパンの作品の一部が流れる「ショパンのベンチ」が設置された。それぞれのベンチにはショパンとの所縁についての説明文と、オーディオガイドや偉大なロマン派音楽のアプリケーションをダウンロードできるQRコードが記載されている。

以外に、古いピアノも納まった。十代の芸術家はようやく勉強や練習、作曲をする場所が得られたわけだ。
ショパン一家が住んでいた頃、宮殿はクラシンスキ家の所有で、現在は美術大学が設置されている。

高校と大学

フリデリク・ショパンは13歳まで自宅で学習していた。1823年9月に6年制のワルシャワ高等学校の4年生に編入した。学校はカジミエシュ宮殿の中央棟に設置され、そのすぐ隣の棟に教職員用の住居があり、そこにショパン一家は住んでいた。

チャープスキ宮殿、現在の
美術アカデミー

1826年にフリデリクは王立科学芸術ワルシャワ大学付属音楽学校で勉強し始めた。講義は主に大学のキャンパスで行われたが、実技の授業は音楽院で実施された。音楽院は聖アンナ教会と王宮の間の旧修道院の建物の中にあった。そこには音楽学校校長兼作曲科教授のユーゼフ・エルスネルが住んでおり、フリデリクの初恋の人コンスタンツィア・グワトゥコフスカが入居していた学生寮もあった。
修道院があった場所は、現在W-Zラインの高架の上で、ヴィスワ河と右岸のワルシャワを一望できる広場になっている。
高校生や大学生であったフリデリクは、新世界通りとクラクフ郊外通りの境目にあるスタシーツァ宮殿の中にあったワルシャワ科学友好協会の図書館に通ったことだろう。　そしてクラクフ郊外通りとオボージナ通りの角にある建物では英語の授業があり、ショパンは学友と出席していた。

ブジェジーナ書店
ブジェジーナに毎日通っているーとショパンは友人に綴った。ミオドーヴァ通り8番のブジェジーナ書店はワルシャワで楽譜の品揃いが最も豊富な店であった。外国からの新譜も輸入され、ショパンの初期の2曲も含め、ポーランドの楽譜も販売されていた。この書店ではなんと、いいピアノを弾くこともできたのだ。

カジミエシュ宮殿は現在ワルシャワ大学の
キャンパスの中心部分にある。

ショパンのコンサート

演奏会でのショパン
フリデリク・ショパンは自ら演奏するだけでなく、他の芸術家の演奏会にも通っていた。セナトルスカ通りの市庁舎や王宮、国立劇場などでの有名な名手のリサイタルにも足を運んでいた。

社交界で

ワルシャワの社交界は若いショパンの芸術的成長に非常に大きな影響を与えた。ほぼ各貴族（明らかにチャルトリスキー家、ザモイスキ家、サピエハ家、ラジヴィウ家、チェトゥフェルティンスキー家、ヴォジンスキ家）が自邸宅で天才少年　、後には逸材の達人青年の出演するコンサートを開催すべく争って招待

大統領官邸/ラジヴィウ宮殿

した。
1818年2月24日にクラクフ郊外通りのラジヴィウ宮殿（現大統領官邸）で開催された、チャリティーコンサートでの8歳のピアニストのデビューはフリデリクを一躍有名にし、首都の記事で注目を浴びた。それ以来、次々と招待を受けた。

ベルヴェデル宮殿

若い音楽家は、クラクフ郊外通りに面しベドナルスカ通りの横にあるワルシャワ慈善事業協会「*Res Sacra Miser*」でも演奏した。ワジェンキ公園のほとりにあるベルヴェデーレ宮殿のコンスタンティ大帝のサロンにもよく招待されていた。当時ワジェンキ公園は一般公開されておらず、ベルヴェデーレ宮殿の住人と客人のみ出入りできた。時を経て1926年に立てられた有名なショパン像や、有名な夏のピアノコンサートのおかげで、最も「ショパン的な」場所の一つになった。

無原罪の御宿り聖母マリアの夫聖ヨセフの加護を受けるワルシャワ・ヴィズィテク修道女教会

その他にもミオドーヴァ通りのモルシュティン宮殿や、ショパンがよく訪問していたセナトルスカ通りの青い宮殿にあるザモイスキ家の中央棟やクレメンティナ・タニス

ショパン常連の旧喫茶店の伝統を引き継ぐ、レストラン「ホノラトカ」の内装。

カ・ホフマノーヴァ邸（入り口はジャバ通り）も、演奏会場となった。ピアニストはブリュール宮殿やおそらくポトツキ宮殿（現文化国家遺産省）、コッソフスキ宮殿、テレサ・キツカが社交界の指揮をとっていた鉄の門に囲まれるラジヴィウ宮殿、そしてセナトルスカ通りのフリードリヒ・フィリペウス邸などのリサイタルに出演していた。

教会で

クラクフ郊外通りにあるヴィズィテク教会でのワルシャワ高等学校の生徒のための日曜ミサで、若い作曲家はオルガンを弾いていた。1825年５月にはマワホフスキ広場のアウクスブルク福音教会三位一体教会でも演奏した。

劇場で

フリデリク・ショパンはオペラや演劇に夢中で、定期的に国立劇場に通っていた。建物は現存していないが、当時はクラシンスキ広場に建っていた。普段は聴衆として着席していたが、舞台に立ったこともあった。1830年に開催された国立劇場での3公演は、故郷を離れる前のワルシャワでの送別会となった。

ワルシャワの喫茶店

19世紀のワルシャワの喫茶店は社交の場として開花した。青年フリデリクはブジェジーナ書店の楽譜棚を訪れたついでに、最も繁盛して政治や文化についての舌戦が繰り広げられていたミオドーヴァ通りの数軒の店をたびたび覗いた。「ポトゥ・コプチューシュキェム（シンデレラの膝元に）」「ジュルカ（小さな穴）」「ホノラトカ（女性の名前）」という喫茶店やスイス人ロールスの斬新なケーキ屋などで、10代のショパンと出会わすことができた。コージャ通りの「ブジェジンスキー亭」という喫茶店にもよく通っていた。

ワジェンキ公園ー水上宮殿

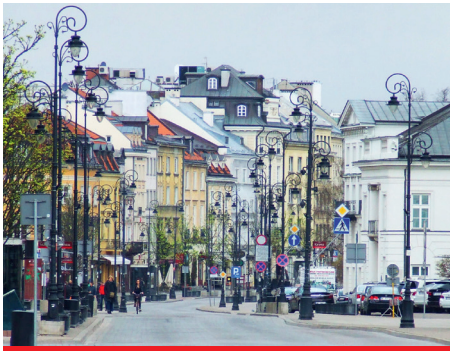
ワルシャワでの日常生活

ミオドーヴァ通りとクラクフ郊外通りは19世紀のワルシャワでの社会生活の中心地であった。その地区に住んで高校や大学で学び、書店や喫茶店に通っていた青年時代のショパンにも、そこで出会うことができた。高校や大学、英語やイタリア語の講義で一緒の友人た

クラクフ郊外通りの聖アンナ教会

ちとも集っていた。ホトゥキェヴィチュ宮殿にはヴォジンスキー家、レンビェリンスキー家やティトゥス・ヴォイチェホフスキを訪ねて行った。マルシャウコフスカ通りに住んでいたプルシャクー家や新市街のアルフォンス・

ワルシャワ・ヴェッセル宮殿



クラクフ郊外通り

ブラントやロムアルト・フービのところにもよく立ち寄った。ドゥーガ通りにはヨアヒム・レレヴェルを訪ねた。エレクトラルナ通り（現在はフウォドナ通りに属する部分）の親友のヤン・マトゥシンスキのところにもよく足を運んでいた可能性がある。10代のショパンはセナトルスカ通りのアントニ・オディニエツやビエラニスカ通りのカイェタン・コジミアンも訪問した。フリデリクがワルシャワを発つ前の送別会はジェルナ通り10番のアレクサンデル・ラインシュミットの家で開かれた。

一番仲の良かったティトゥス・ヴォイチェホフスキとは、街の隅々、つまり三十字架広場からズィグムント碑まで満遍なく散歩したと、ショパン自身も言っていた。旧・新市街やマリヴィルスキ広場（現・劇場広場）もぶらぶらしていた。時にはジョリボシュ方面のピアリスト会のレオポルド・ポレティウワや、ビエラニ地区のカマルドレーゼ教会修道院も訪ねていた。子供のころ冬に坂を滑って遊んでいたブロヴァルナ通りやオボージナ通りもよく知っていたことが、両親や友人との手紙に記されている。

フリデリクが市外に出る時は必ず、トレンバツカ通りとクラクフ郊外通りの角の郵便局と駅馬車の停留所のあったヴェッセル宮殿から出発した。その立派なロココ調の建物には、現在検察庁本部が設置されている。

聖十字架教会

聖十字架教会は19世紀初期ワルシャワで一番大きな教会だった。アダム・ミツキェヴィチュ、ユリウシュ・スウォヴァツキ、ユーゼフ・イグナツィ・クラシェフスキ、ボレスワフ・プルスやヴワディスワフ・シコルスキ将軍など、200年に渡る偉大なポーランド人の墓碑銘や記念プレートが聖堂内に掲げられている。

クラクフ郊外通りに住んでいたショパン一家の所属する教会でもあった。この聖十字架教会で、フリデリクの妹2人、イザベラとエミリアが洗礼を受けた。そしてまさにここに、弟の遺言に従って姉のルドヴィカがポーランドに持ち帰った、ショパンの心臓の納められた壺が保管されている。

教会の中には1880年にワルシャワ音楽協会によって寄付された作曲家への記念プレートが掲げられている。そこにはマタイによる福音書からの引用で、「あなたの宝のある所には、心もあるからである」と刻まれており、その少し上にレオナルド・マルツォーニ作の胸像が掲げられている。

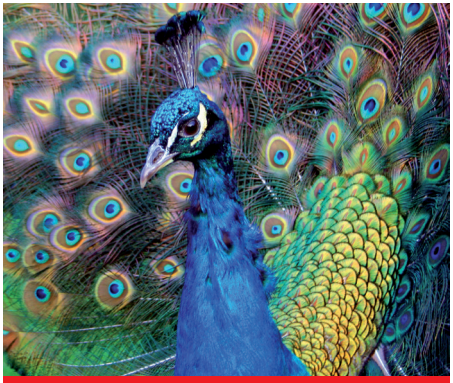
第二次世界大戦時に教会は大きく破壊されたが、ショパンの心臓の壺はその前に安全な場所に移されていた。（ミラヌーヴェクの項目参照）

聖十字架教会内にあるショパンに捧げられたプレート

聖十字架教会

ワジェンキ公園 ショパン像と

ワジェンキ公園の歴史は17世紀に遡り、当時の領主スタニスワフ・ヘラクリウシュによって隠れ家と豪華な装飾が施された浴場の２棟が建てられたのが始まりだ。18世紀半ばにはスタニスワフ・アウグスト王の夏の離宮となった。その頃に広い散歩道に囲まれた全建造物群（旧オランジェリー、ホワイトハウス、島に舞台のある円形劇場、ミシレヴィーツェ宮殿など）が建設された。
19世紀にはさらにいくつかの新しい古典建築様式の建物が増築された。1817年にはワジェンキ公園はアレクサンドル1世の所有となり、ベルヴェデーレ宮殿には弟のコンスタンティ大帝が居住し、1822年からはショパン少年を自分のサロンに何度も招待した。
第二次世界大戦中、火事によってひどく破壊されたが、ワジェンキ公園の遺産物の改築に成功し、博物館や庭園として一般公開されている。
ワジェンキ公園といえばヴァツワフ・シマノフスキ作のショパン像が思い浮かぶ。これはポーランドで最も有名で人気のあるフリデリク・ショパンの像の一つである。ウヤズドフスキエ大通りに面する



公園の遊歩道を厳かに歩く鮮やかな孔雀はワジェンキ公園に華を添えている。

る公園の正門を入ってすぐにある池の畔にある。1926年に除幕式が行われ、1940年にはナチスによって取り壊された。その名残で今もなお台座に「フリデリク・ショパン像は1940年5月31日にドイツ人によって破壊撤退されたが、国民は再建する。1946年10月17日」と刻まれている。
第二次大戦後の1958年に像は忠実に修復され、同じ場所に再建された。台座に
「炎は描かれた作品をズタズタにし、
盗賊は父子の宝物を空っぽにするが、
歌は全て生き残る...」というアダム・ミツキェヴィチュの詩が刻まれている。
1959年から今日に至るまで、像の前での日曜ショパンコンサートが開催されている。5月上旬から9月末まで開催されており、大変人気がある。

ワジェンキ公園のショパン像

フリデリク・ショパン博物館

博物館はオクルニク通り1番に聳え立つオストロクスキ宮殿にある。16世紀末にクラクフのヤヌシュ・オストロクスキ公はここに要塞の役割をする建物の建築を依頼したが、実際には17世紀半ばに当時の所有者ヤン・グニンスキによってティルマン・ガメルスキ設計の宮殿が建て

国立フリデリク・ショパン研究所

2001年、ポーランド国会の決議で開設された研究所は、学術研究やフリデリク・ショパンの人物や音楽についての知識の普及、書籍や録音、マルチメディアの出版などに携わっている。NIFC（ショパン研究所の略称）は10年以上前から毎年8月にワルシャワで「ショパンと彼のヨーロッパ」という一流の国際フェスティバルを、2010年からは1927年からの伝統ある国際ショパンピアノコンクールを主催している。またコンサートシリーズ、シンポジウム、学会、マスターコースの発起人でもある。世界各国のショパン研究所や組織と協力しながら、重要な記録や展示物を収集し、ワルシャワショパン博物館とジェラゾヴァ・ヴォーラのフリデリク・ショパンの生家の管理に当たっている。研究所はホームページwww.chopin.nifc.pl にショパン情報センターを開設している。

られた。その後宮殿は何度か改築され、所有者によって用途も変わった。
歴史的にこの場所はフリデリク・ショパンとも彼の家族とも関りがあったわけではないが、フリデリク・ショパン研究所はショパン遺産の組織立った保護を1934年にまさにここで開始した。建物は第二次世界大戦中にほぼ全壊したが、1954年に再建後フリデリク・ショパン協会本部が設けられ、2005年まで運営されていた。現在はここに国立フリデリク・ショパン研究所管轄の博物館が設置されている。
ワルシャワのフリデリク・ショパン博物館所蔵品の中には世界最大のショパンコレクションがある。その中には個人的な所有物（作曲家や家族、知人の記念品）、自筆の資料（手紙や楽譜）、出版物、貴重な肖像画や彫刻品などの図像が見られる。
内装改装後の2010年からは近代的なマルチメディアの展示も見学できる。内装と展示の構想は、ポーランドの博物館関係

フリデリク・ショパン博物館内

者や学者、芸術史研究者やイタリア・ミラノMigliore&Servetto設計スタジオのアーティストとの共同作業によって誕生した。
博物館常設の展示物に加えて、とても貴重で独自の企画展も見られる。この博物館はワークショップやコンサート、執筆者と読者の集いなどを企画しての教育活動を通じて、例外的な文化の中心の役目も果たしている。

www.muzeum.nifc.pl
フリデリク・ショパン博物館
住所：ul. Okólnik 1（オクルニク通り1番）

フリデリク・ショパン博物館

マゾフシェ地方の民家ーシェルプツのスカンセン（野外民俗博物館）

ジェラゾヴァ・ヴォーラの公園

フリデリク・ショパンのマゾフシェ

フリデリク・ショパンはマゾフシェ地方にある小さな田舎のジェラゾヴァ・ヴォーラで生まれたが、まだ数ヶ月の時に家族が引っ越したワルシャワが彼にとっての最初の思い出の場所である。都会の文化の中で育ったわけだが、マゾフシェ地方の田舎や民俗文化にも魅せられた。街から遠出した時に田舎の風景や民俗音楽からインスピレーションを受ける機会はたびたびあった。

幼いころからワルシャワを離れて夏休みを過ごした。身体の弱い子供を学校の休みの間は気候の違う場所に連れて行くようにという医者の勧めに家族は従ったという一面もあったが、ショパンの父はどんなに小さな旅行でも教育のために欠かせないものだという考えを持っていたからだ。

初めての休暇旅行についての記録は多くは残されていないのだが、ショパン家と親しかった家族の田舎を訪ねてマゾフシェ地方を旅行したようだ。まずショパン一家がヴァカンスに出かけたのは、やはりジェラゾヴァ・ヴォーラだろう。ワルシャワに移転後数年は、フリデリクの家族にとって第二の家のようなものだったかもしれない。道中ソハチェフやショパン家の教会ともいえるブロフフの教会を訪ねたことは間違いないだろう。

夏の旅行中にショパンはマゾフシェ地方の他の村も訪れた。場所によっては夏休み中滞在することもあったが、シャファルニアやドゥシュニーキ、グダニスク、ベルリンやウィーンなどの遠方旅行の道中に、少しだけ立ち寄ったところもある。

旅人

フリデリク・ショパンはロマン派時代の典型的な旅行者ではなく、極めて行動的な人であった。人生の3分の1は道中で過ごし、有名なアーティストの移動のテンポやハードさは蒸気機関車より自動車時代並みだったと言えるだろう。

晩年期の旅はショパンにとって楽しみというより、演奏家の生活要素として切り離せない、余儀なく仕方ないものになった。学生時代の休暇旅行は見聞を広め、友人との交流を深め、休養するための恒例行事であった。多数の旅行でショパンは合理的な旅程を組む術を覚えた。最新で最短の交通手段を選び、駅馬車から汽車や帆船、蒸気船に至るまであらゆる乗り物を利用したことが、彼の記述から伺える。長距離の移動を自覚し、我慢強く旅の困難や不便に耐えた。

2 ミラヌーヴェク

第二次世界大戦終期（1944～45年）ショパンの心臓の納められた壺はミラヌーヴェクにあった。作曲家の死後、亡骸はパリのペール・ラシェーズ墓地に埋葬されたが、心臓はフリデリクの遺言に従って姉のルドヴィカがワルシャワに持ち帰り、聖十字架教会の柱に埋め込まれた。

ワルシャワ蜂起の戦闘中に聖十字架教会が破壊されることを確信したドイツ人が、ショパンの心臓の壺を聖堂から運び出した。エーリヒ・フォン・デム・バッハ＝ゼレフスキ将軍は、占領下当時ワルシャワ教区監督であったアントニ・シュラゴフスキ司教に壺を託した。司教は心臓をミラヌーヴェクの聖ヤドヴィガ教会の牧師館の２階にある私用の祭壇に納めた。ワルシャワには1945年10月17日のショパンの96周忌に戻された。

牧師館の入り口の横の壁にこの出来事についての記念プレートが掲げられている。そこには「この牧師館に1944年9月９日から1945年10月17日までフリデリク・ショパンの心臓の壺が保管されていた。」と記されている。牧師館のすぐ横にはヤヌシュ・トマシンスキ作のショパンの胸像が1998年にミラヌーヴェク住民から寄贈された。

ミラヌーヴェクの教会

ミラヌーヴェクにあるフリデリク・ショパンの胸像

クルフキの首都

クルフキという、とても美味しいキャラメルの主原料は牛乳で、これはポズナニの菓子職人フェリクス・ポモルスキ発案の傑作でミラヌーヴェクの誇りでもある。第二次世界大戦初め、有名なポモルスキは家族とともに、ドイツ軍によってヴィエルコポルスキ地方の自工場と自宅から追い出された。ミラヌーヴェクに辿り着き、新しい菓子工場を開設した。彼の孫は家業を引き継ぎ、ポーランドで最も有名なクルフキを生産している。聖ヤドヴィガ教会のすぐ向かいにあるパチェシニ家の菓子屋などで購入できる。

www.milanowek.pl
www.milanowekswjadwiga.pl
聖ヤドヴィガシロンスク教会　住所：
ul. Kościuszki 41（コシチューシュキ通り41番）

周辺

オトレンブースィ
民俗文化と自動車社会

ワルシャワ郊外の村オトレンブースィ・カロリンにある文化遺産の庭園に囲まれた宮殿に、1948年国立民族合唱舞踊団「マゾフシ

ェ」が発足した。2009年から伝説的な団体の本拠地は、580人収容のメインホール以外にもリハーサル室や衣装の仕立屋工房、「マゾフシェ」の衣装や記念品が展示されている博物館、さらに会議室も備えた近代的な建物に置かれている。ヨーロッパ・マテチュニク・マゾフシェセンター（ECMM）では、地域と国の文化遺産保護と世界各国の文化後継者の養成を目的に、様々な文化活動が行われている。
オトレンブースィには年代物の自動車やバイクが約300台展示されている自動車博物館もある。最古のものは20世紀初めに、新しいものは共産主義時代末期に製造されたものである。その他にもグラモフォンや軍用品、ロンドンの電話ボックスなどの骨董品も集められている。

www.mazowsze.waw.pl
www.muzeum-motoryzacji.com.pl

オトレンブースィの自動車博物館

周辺

クションジェニーツェ

現存しているショパンの手紙のおかげで1824年以降のフリデリクの青少年時代の休暇旅行について詳細な記録が残されているが、それ以前から少年がワルシャワ外で過ごしていたという確証はない。友達のエウスタヒ・マリルスキの両親に招待されて、グロジスク・マゾウィエツキの近くのクションジェニーツェに行ったことは間違いなさそうだ。マリルスキ家の庭に囲まれた館の周りには肥沃な畑や草原や森が広がっていた。この美しい背景でフリデリクとエウスタヒは夏の数日を送ったのかもしれない。ペンチーツェで過ごしたという説もあったが、最新の研究ではマリルスキー家はこの時期、主にクションジェニーツェで暮らしていたことが確認されている。
ショパンが滞在したと思われる館は現存しない。ワルシャワ蜂起の際、エウスタヒ・マリルスキへの手紙などのショパンの思い出の品も壊滅した。

3 ワーズィーパシコーニェーザヴァーディ
フリデリク・ショパンの菩提樹大通り

ワーズィはカンピノスとジェラゾヴァ・ヴォーラの間に位置し、旧王道沿いにある村である。ここにはブロミルスキ家、後にクランコフスキ家所有の18世紀の館の跡が残っている。
19世紀の聖ドロータ教会のある近くのザヴァーディまでは3kmの美しい景色の田舎道が走っている。道沿いに850本以上の菩提樹が林立しており、そのうち780本近くが天然記念物に指定されている。

www.kampinos.pl

フリデリク・ショパンの菩提樹大通り

ジェラゾヴァ・ヴォーラのフリデリク・ショパン像

4 ジェラゾヴァ・ヴォーラ
フリデリク・ショパンの生家

ジェラゾヴァ・ヴォーラの歴史は17世紀後半に遡る。登記書によるとショパンの生前には敷地内に本館と別棟、オランジェリー、馬小屋、車舎があった。屋敷は当時のこの地方で典型的な長方形の石造りで、建物の中心を廊下が突き抜け庭への出口に続いている。廊下の両側には住人の部屋があり、大きな食堂と台所、食物倉庫も造られていた。2階部分は天井の高い屋根裏になっており、主に寝室が設けられていた。これらはショパン一家と親しいスカルベク一族の所有地であった。全資産はジェラゾヴァ・ヴォーラとオルウフ近辺に広がっていた。この2ヶ所の所有地は急流のウトラータ川をはさんでいた。1801年からはルドヴィカ・スカルベク伯爵夫人が資産管理をし、ここに後にショパンの代父になる長男のフリデリクも含めた自分の子供たちと住んでいた。

ショパンの両親はまさにこのジェラゾヴァ・ヴォーラで知り合ったと言われている。クシジャノフスキ家出身のユスティーナはスカルベク一家と同居し家事を手伝っており、ミコワイ・ショパンはフランス語の家庭教師をしていた。結婚後は左別棟で暮らし、そこで1810年3月1日にフリデリク・ショパンが生まれた。しかしながら、1810年秋にショパン一家はワルシャワに移住したので、彼の幼少時代はジェラゾヴァ・ヴォーラとは関りがなかった。後年ショパン一家はとりわけクリスマスや夏休みにスカルベク家をたびたび訪ねるようになった。

フリデリクは自分の生家に何度も戻った。1823年の夏には少し滞在したようだ。1825年のクリスマスと1826年の新年は姉と一緒にジェラゾヴァ・ヴォーラで過ごしたらしい。1830年の夏に家族と一緒にスカルベク領で楽しんだのが最後だった。ジェラゾヴァ・ヴォーラでの訪問中は屋内や楽器を持ち出して屋外でも一緒に音楽を楽しんだ。

ショパンを記念してのジェラゾヴァ・ヴォーラの屋敷の再建構想は19世紀末に持ち上がった。1891年に当地に博物館を開設するための作業が始まった。1894年にはロシア帝政から公園

ジェラゾヴァ・ヴォーラの館は
サマーコンサートの場所である。

内に今もある記念オベリスクを建立する許可が下りた。しかし施設がポーランド文化にとって特別な意味を持つ文化財に指定されたのは、ポーランドの独立後の1920年代だった。

いくつかの協会の尽力や絶大な社会的支援のおかげで19世紀初期の物品を収集することができた。ショパンが好んで弾いていたプレイ

! 15歳のフリデリク・ショパンから親友ヤン・ビアウォブウォツキ宛の手紙。1825年12月24日付

親愛なるヤンくん！この手紙がどこから出されるか、絶対当てられないだろう。カジミエシュ宮殿の2番目のドアからだと思うでしょ？違うよ。じゃあもしかして－いやいや、考えなくていいよ、無駄だから。正解はジェラゾヴァ・ヴォーラからなんだ。－まあひとつの謎は解けたわけだけど、いつ書いてるかわかる？いつ？…これもまた当てられないだろうから言うけれど、駅馬車から降りて館で腰かけるなり書いてるんだ。そういう運命だったみたい、ママは僕が行くことに余り賛成しなかったんだけど、やっぱりどうしようもなくて、僕とルドヴィカはジェラゾヴァ・ヴォーラにいるんだ。

エル社のピアノもジェラゾヴァ・ヴォーラに運び込まれた。多数の寄贈品の中には、フランチシェク・クシヴダ＝ポルコフスキ教授の素晴らしい設計の施された公園がさらに美しくなるよう、世界各国から特別に送られた様々な植物の苗もあった。

第二次世界大戦中には博物館と周りの公園は全壊された。ショパン没後100周年の1949年になってようやく、再築された展示の開設式が荘重に行われた。

2005年からは国立フリデリク・ショパン研究所がジェラゾヴァ・ヴォーラの管財に携わっている。大がかりな工事と投資の後、2010年春にはショパン生誕200周年を記念して復元されたフリデリク・ショパンの生家のオープニングセレモニーが盛大に行われた。公園内には新しく数千本の植物が植えこまれ、ウトラータ川の畔に新しい「バルカローレ」という夏期の舞台が設置され、ボレスワフ・ステルマフ設計のプレリュード館（受付、書店、観光サービス設備）やエチュード館（映写室と喫茶店）、スケルツォというオランジェリーも併設された。

数値で見るジェラゾヴァ・ヴォーラ

ジェラゾヴァ・ヴォーラのフリデリク・ショパンの生家には毎年10万人以上の観光客が訪れる。ポーランドに公式訪問中の王室メンバーや政府要人もここを訪ねることがある。芸術家、とりわけ音楽家にとっては特別な、神聖な、と言っても過言でない場所である。来訪記念帳には世界各国から200カ国以上の代表者が記帳している。

6月の最初の週末の大規模なピクニックの時はジェラゾヴァ・ヴォーラが子供たちに占領される。毎年子供の日（ポーランドでは6月1日）の祭りには幼い音楽ファンが数千人ここに訪れる。

2015年にリニューアルされた常設展示のシナリオは、ジェラゾヴァ・ヴォーラとポーランドの大作曲家が誕生した別棟の歴史についての最新研究情報に基づいて準備された。解説はショパ

ジェラゾヴァ・ヴォーラ・フリデリク・ショパンの生家

ン家とスカルベク家の歴史およびユニークで近代的な庭園や記念碑を伴う博物館の設立についての変遷に焦点を当てている。展示の中で重要なものはショパン生家では初めて数多く揃ったオリジナル品で、ショパン家の居間とミハウ・スカルベクの書斎の復元を試みたことも一見に値する。

ショパンの生家では1954年から日曜ピアノコンサートが開催されている。コンサートシーズンは5月から9月まで続く。ピアニストにとっても聴衆にとっても特別な味わいがあるリサイタルは建物の中で行われるが、ドアや窓は開放され、そこからショパンの音楽が集まった聴衆に聴こえてくる。

ここ数年前からは子供のためのイベントシリーズが開催されている。中でも6月の第1日曜には子供の日祭りが企画されており、プロのショパン弾きから才能豊かな小さなピアニストまで様々な演奏を生で聴ける素晴らしい機会が設けられている。当日は子供向けの本の著者と出会うことができ、有名な俳優が抜粋して朗読するのを聞くことや、フリデリク・ショパンの音楽や人生についての知識をワークショップや野外ゲームをしながら身につけることもできる。

www.chopin.museum
ジェラゾヴァ・ヴォーラ・フリデリク・ショパンの生家と公園、ワルシャワ・フリデリク・ショパン博物館支部
住所：Żelazowa Wola 15
電話番号：46 863 33 00

ジェラゾヴァ・ヴォーラ ～スカルベクー族の資産

ルドヴィカ・スカルベク伯爵夫人　旧姓フェンゲル（1765年トルン生、1827年ワルシャワ没）は福音主義で爵位を持つ裕福な商人と銀行家一族の出身であった。教養高く資産家であったので、最適な嫁候補だった。1791年イノヴロツワフ城代の子息カツペル・スカルベク伯爵に嫁いだ。夫婦は5人の子供を授かった。（長男のフリデリクは有名な経済学者、歴史家、文学者であり、ショパン家からフリデリクの代父を託された。アンナは後にストゥシジェフ村のステファン・ヴィエショウォフスキの妻となり、フリデリク・ショパンの代母でもあった。テオドル、ミハウ、そして幼くして他界したカジミエシュ）伯爵にとって有利なこの結婚によって、スカルベク伯は借金を返済することができたが、浪費癖は変わらなかった。強気で機転の利くルドヴィカ伯爵夫人の気性と離婚の決断がなければ、破産への道を辿っていただろう。1801年カツペル・スカルベクは債権者から逃走し、それ以降ルドヴィカ伯爵夫人が資産管理と子供たちの養育の重荷を背負うことになった。そういう背景でユスティーナは伯爵夫人の多大な家事を手伝うため、ジェラゾヴァ・ヴォーラに住み込むようになったのかもしれない。しばらくしてミコワイ・ショパンがフランス語の家庭教師として正式に雇われた。そしてこのジェラゾヴァ・ヴォーラでフリデリク・ショパンの両親は知り合ったと考えられる。ピョトル・ミスワコフスキによると、ルドヴィカとショパン夫妻の間柄は雇主と働き人の関係と定義でき、社会的にも経済的にも格差はあったものの、家族同様の親しいつきあいをしていたようだ。このような彼らの身近な関わり方は、ユスティーナがスカルベクー族と親戚であったことも一因しているに違いない。ショパン一家はミコワイ・ショパンがワルシャワ高等学校で働き始めることでワルシャワに移住する1810年秋までは、ジェラゾヴァ・ヴォーラに留まった。それ以降も二家族は友人関係を保ち、機会ある毎にワルシャワにもジェラゾヴァ・ヴォーラにもたびたび訪問しあった。ジェラゾヴァ・ヴォーラは1818年からスカルベク伯爵夫人の息子（まずはフリデリク、後にミハウ）に譲渡された。

ブロフフ聖ロクス・洗礼者聖ヨハネ教会

5 ブロフフ

ブロフフの聖ロクス教会はショパン家にとって重要な場所である。1806年6月28日、このブロフフの聖堂の祭壇の前でミコワイ・ショパンとテクラ・ユスティーナ・クシジャノフスカは結婚式を挙げた。そして1810年4月23日の復活祭の時にフリデリク・フランチーシェク・ショパンが同じところで洗礼を受けた。両親はフリデリク・スカルベクを代父と見做していたが、洗礼証明書には洗礼式の時に委任された代理人と思われるチェプリヌィ村のフランチーシェク・グレムベツキが記録されている。ミコワイとユスティーナの一人息子の代母はスカルベク家の娘アンナで、後にヴィショウォフスキ家に嫁いだ。ブロフフのこの教会では1832年にショパンの姉のルドヴィカとユゼフ・カラサンティ・イェンジェイェヴィチュとの結婚式も挙げられた。ショパン一家はジェラゾヴァ・ヴォーラに行くたびに聖ロクス教会を訪れたようだ。

ブズーラ川の畔の聖堂はポーランドでは数少ない要塞教会である。ブロフフ最初の教会はヴワディスワフ・ヘルマン公統治時代の1113年以前に建てられた。1350年頃に教会の石造建築が始まった。現在の聖堂は1665年にオルブラフ・アドリアン・ラソツキによって増築されたものだ。赤レンガ造りの教会は3塔の円柱塔を伴って聳え立ち、角に堡塁の備え付けられた防壁で囲まれている。現在は聖ロクス・洗礼者聖ヨハネ教会と呼ばれているこの聖堂の中にある、記念プレートや19世紀前期にはすでに使われ現在まで残っている洗礼盤によってショパン家の歴史が思い浮かぶ。教会の正門に向かって左側にある、教会の守護聖人である聖ロクスの古い彫刻も一見の価値がある。

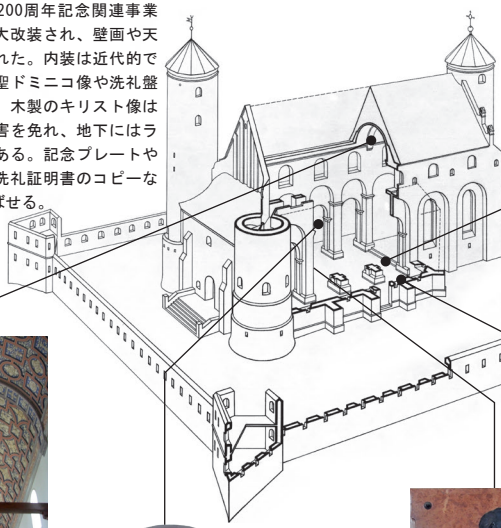
> **!** 教会の洗礼記録帳には、1810年2月22日がフリデリク・ショパンの生年月日として記録されている。長年に渡って作曲家に関する文献にこの日付が記載されていたため、これが正しいと思われていた。ところがショパン自身や家族は3月1日が誕生日だといつも言及していた。
> ショパンの生年月日についての論争は何月何日かだけでない。日付や月、そして何年生まれかについても検討しなくてはならない多数の発見がある。

ブロフフ教会の内装

オスカル・ソスノフスキによるブロフフ聖ロクス教会

ブロフフの教会は両世界大戦で深刻な破壊を被り、各大戦後再建された。2008年～2009年には2010年のフリデリク・ショパン生誕200周年記念関連事業の一環で、聖堂は大改装され、壁画や天井画などが再現された。内装は近代的であるが、18世紀の聖ドミニコ像や洗礼盤は残存したもので、木製のキリスト像は1914年の爆撃の被害を免れ、地下にはラソツキー一族の墓がある。記念プレートや展示ケースの中の洗礼証明書のコピーなどがショパンを偲ばせる。

内陣、祭壇の両側にある18世紀の聖人像



2010年までに改装された天井画と壁画

第一次世界大戦の戦火を免れたキリスト像

フリデリク・ショパン洗礼記念プレート、その横にあるショパンの両親と姉ルドヴィカの結婚記念プレート

1810年4月23日に小さなフリデリク・ショパンが洗礼を受けた洗礼盤

www.brochow.pl
www.brochow-parafia.pl

6 ソハチェフ

ソハチェフはワルシャワからシロンスク地方や、多数の旅中にショパンが何度も滞在していたドブジン地方に走る街道の途中にある。ジェラゾヴァ・ヴォーラに行った時にもソハチェフを訪ねていたことは明らかだ。
ショパンのソハチェフ滞在で一番興味深い出来事は、1830年の夏に起こった。音楽愛好者であったピョトル・シェンベク将軍の招待を受けて、20歳のショパンがミハウ・スカルベクと一緒に第三歩兵旅団のキャンプを訪れたことだ。兵士たちはマゾフシェ公城跡近くの丘の上にある、旧ドミニコ修道院に待機していた。その時は共演には至らなかったが、しばらくしてその機会が訪れた。むしろ機会が作られた。1830年8月29日、フリデリクはワルシャワの自宅からさらって行かれるように、特別に彼のために馬を補強した「急行駅馬車」が横付けされ、軍事キャンプに連れていかれた。先日シェンベク将軍のキャンプにもまた行ったんだーとフリデリクは手紙に書いた。将軍はソハチェフに常任していて、ミハ

ウに僕を連れて来るよう約束してたってことを、君に言っておかなくちゃね。でもそれが実現しなかったもんだから、チャイコフスキー[…]副官に迎えに来させたんだ。急遽開かれた演奏会には連隊オーケストラが出演し、シェンベク将軍自身も演奏した。ショパンは彼について「とても音楽性があって、ヴァイオリンを上手に弾くし、パガニーニの信奉者だから、音楽愛好者の上級者に属する。」と綴った。キャンプにはピアノがあり、フリデリクはピアノ協奏曲第2番のアダージョ等自作の演奏を行った。ショパンの演奏披露後は一刻も早くワルシャワに送り届けられた。

ソハチェフのフリデリク・ショパン像

ショパン像
ソハチェフの公園のワルシャワ通りとトラウグッタ通りの交差点に、フリデリク・ショパン記念像が建っている。石台にポーランドの最も偉大な作曲家への敬意を表した鋳造青銅板と、その横にはショパンの横顔の浮き彫りが埋め込まれたオベリスクがある。像の設計及び制作は有名な彫刻家ミロスワフ・ビスクープスキによる。

ヨパン　ショパンの生活のテンポは人並外れたものだった。ソハチェフに行って、演奏し、会食し、ワルシャワに帰宅し、その日の夜に国立劇場の上演に駆けつけて、少し遅刻はしたもののオペラの第1幕を鑑賞したこともあった。

ソハチェフのマゾフシェ・ピアスト朝要塞はすでに13世紀に存在し、最初の石造の城は14世紀に建設された。ポーランド王国支配下に置かれた15世紀以降は何度も増築された。17世紀にはジグムント3世の依頼により初期バロック建築様式を取り入れた大掛かりな改築が行われた。スウェーデン大洪水時代やコシチューシュコ蜂起などで幾度も破壊され、現在

リトグラフ画家カジミエシュ・ストロンチンスキによる1851年作のソハチェフ城跡ーショパンの時代にはすでに廃墟だった。

マゾフシェでの国際ショパンフェスティバル

ソハチェフでは1993年からショパンフェスティバルが開催されており、今では国際イベントに昇格している。参加者は我々の偉大な作曲家フリデリク・ショパンの作品と、彼の作風にとりわけ影響を与えたヨハン・セバスティアン・バッハの作品を演奏する。演奏者はポーランドと外国の優れた音楽教育者やピアニストの審査員によって評価される。

は城壁のわずか一部分だけが残っている。19世紀初めから再建の動きはなかったので、ショパンがソハチェフを訪れた時から、城跡のある丘の眺めはほとんど変わっていない。
ここ数年で城跡は改修され、一般公開された。

狭軌鉄道博物館

狭軌鉄道博物館はソハチェフ通勤鉄道旧駅構内にある。館内には鉄道員の仕事に関する展示物が収集されている。館外の野外鉄道博物館では、140以上のSLや機関車、旅客者、貨車その他鉄道車両の展示を鑑賞することができる。この種のコレクションではヨーロッパの中で最大級にあたる。コレクションの中には、ユゼフ・ピウスツキ元帥用特製の自動車のような車両や、ヴォイチェフ・ヤルゼルスキー将軍の応接車、ワルシャワという車の鉄道車両改造車、そしてポーランドで有名なアニメの人気キャラクターであるコジョーウェク・マトーウェク（まぬけなヤギ）車など、珍しい展示がある。

草原と森を抜けて

4月から10月にかけての博物館の特別アトラクションは、毎週土曜日（夏休み中は水曜日も）に開催されているレトロ列車での旅だ。小旅行はガイド付きの博物館見学から始まる。その後、乗客は列車に乗り込み、独特な汽笛を鳴らして町を通り抜けてカンピノス森へと向かう。最初に停まるヴィルチェ・トゥウォフスキエ駅で、ガイドは希望者を30分のカンピノス森の散歩に連れて行く。次のアトラクションは、トゥウォヴィーツェにある森の中のキャンプ場だ。年代物の小さな駅のすぐ横のきちんと整備された大きな原っぱには、焚火を囲んでピクニックをすることができる素敵な場所がある。楽しく時を過ごすための必需品は現地で調達できる。

ショパンのグルメ

ソハチェフはショパンの好物をもとに考案された料理を味わってみるという珍しい体験スポットになるかもしれない。ホテル・ショパン内のレストランでは、伝統的なポーランド料理のアクセントとフランス料理のアレンジを組み合わせたスペシャルショパンメニューが、5月から10月まで用意されている。ルクレツィアという菓子店特製ギフトボックス入りの「ショパンのマズルカ」がお土産にいいかもしれない。

www.sochaczew.pl
www.mkw.e-sochaczew.pl
www.naszzamek.pl

ショパンメニューのRusselコーヒークリームメレンゲケーキ

周辺

イウフ

イウフは1506年～1863年は市制施行されていたが、現在は村である。中心に広場があるという市街形成を見ると、市としての過去をうかがえる。1506年にイウフの領主ラザノフスキ族はアレクサンデル王から市制施行と年に4回の歳市と週に1度の市の開催をクルム法に従って許可された。イウフでの大きなバザーは今でも毎月1日と15日の次の水曜日に開かれている。

イウフの最も重要な文化財は、ソハチェフ城主のアダム・ラソツキによって建設された後期バロック建築様式の十字架称賛・ポーランド女王聖母教会である。石造りの教会は1781年に狭い三辺に囲まれた内陣を備える単廊式教会として建立された。教会は何世紀にも渡って何度も破壊され再建された。

イウフ村のおすすめ観光スポットは自然保護区のジェプキ森林公園だろう。43.94ヘクタールに広がる一帯には針葉樹林帯と広葉樹林帯が混交している。ヴィスワ渓谷のシデやナラの木も混じった美しい老松樹林が保護されている。植物学者は保護区に14種類の苔と125のシダ類の植物を確認している。ジェプキ森林公園を散策していると、マルタゴンリリーやセイヨウイソノキ、セイヨウカンボクなどの保護種を知る機会に恵まれ、運がよければナベコウというコウノトリ属の珍しい鳥が巣づくりしているのを見ることができる。保護区には7kmに渡るハイキングコースが設けられている。

バロック建築のイウフ教会

自然保護区ジェプキ森林公園

周辺

ムウォジェシン

ソハチェフの近くにあるムウォジェシン村の周りにはヴィスワ河とブズーラ川の美しい河畔の風景が広がっている。ムウォジェシンの見どころの一つの19世紀の古い庭園は5ヘクタール近くの広さがある。現在、庭園は放置されており、敷地内の館は荒廃している。ムウォジェシン聖母マリア誕生教会の横には、1875年の旧教会の遺跡である鍾塔が訪問者に公開されている。ナチス占領中にはここで約30名の捕虜人がドイツ人によって殺された。

近くのカミオンでは教会に立ち寄る価値があり、周辺のルーシュキやヴィトゥコヴィーツェには古い館や庭がある。これらは私有物で見学はできない。ヴィトゥコヴィーツェの館は入念に改装され、庭園は整備されている。ルーシュキの館は荒廃している。

7 サンニーキ

サンニーキについての初めての記述は中世に遡る。地名はこの村の住民の特産品であるソリ（ポーランド語でサニ）が由来である。このさほど大きくないが画期的に開発が進んでいるこの村はゴスティーニン郡にあり、ワルシャワから85kmほど離れている。

> 1828年9月9日付ティトゥス・ヴォイチェホフスキ宛のフリデリク・ショパンの手紙より　親愛なるティトゥスへ！信じられないだろうけど、君と君のお母さんの知らせをものすごく待っていたんだよ。だから手紙を受け取った時の僕がどれだけ大満足だったか想像してみて。ちょうどその時、サンニーキのプルシャク邸にいたんだ。夏中ずっとあそこにいたんだよ。ーあそこでの楽しみについては何も書かない、君だってサンニーキに行ったもんね。

サンニーキは何世紀にも渡ってマゾフシェ公の領地であったが、その後王国の領地の一部となり、貴族に借用された。19世紀前半にはポメラニア出身のプルシャク一族の私有地となった。18世紀末にグダニスクのトマシュ・プルシャク城代が、サンニーキの17世紀の木造の館を石造に新築することにした。こうしてヴワディスワフ・マルツォーニ設計による、当時流行のイタリアの屋敷風で新古典主義スタイルの宮殿建築が始まった。その後宮殿は幾度も増築再建されたが、フリデリク・ショパンが滞在した建物と同じものなので、マゾフシェの観光コースの中でもショパンに所縁ある場所としてとりわけ貴重なスポットである。

フリデリク・ショパンは1828年にサンニーキで休暇を過ごした。学友であるコンスタンティ・プルシャクの招待を受けて、彼の父アレクサンデル・プルシャク所有のこの立派な屋敷を訪れた。フリデリクは遊びを楽しみ、休息や散策、周辺の小旅行をしながら夏を過ごした。音楽愛好家のプルシャク家にはいい楽器があったので、好きなだけ弾くことができ、作曲にも専念できた。おかげで2台のピアノのためのロンドハ長調を完成させ、トリオの作曲にも取り組んだ。あまり乗り気ではなかったが、コンスタンティの妹のオレーシャにピアノも教えた。

サンニーキの資産はプルシャク家からナタンソン家などが引き継いで製糖業などに従事し、その工場が塀越しに現存している。第2次

サンニーキの宮殿

宮殿の内部

世界大戦後は国有地となり、長年にわたり国有集団農場(PGR)の本部が置かれた。また、教育機関の事務所や施設も多数設置された。1981年からようやくショパンの伝統に戻り始めた。宮殿と周辺の庭園は改装を繰り返し、2013年に大改修が終了し、サンニーキ・ヨーロッパ・フリデリク・ショパン芸術センターが発足した。新しい宮殿にはコンサート会場、博物館、会議場、娯楽場、そして素晴らしい近代的な図書館が設置されている。内装はすみずみまで入念に復元されたおかげで、18～19世紀元来の多彩な壁画装飾の一部を鑑賞することができる。演奏会や教育活動の意欲的な取り組みや非常に活発な展示会によって、この芸術センターはショパン関連事業の大切な場所となりつつある。ショパン自身が関った当時の姿と変わらず現存しているポーランドで数少ない場所の一つという事実は、当地の重要性を高めている。

ルドヴィカ・クラスコフスカ＝ニッチュの設計による1985年製ショパン像

www.sanniki.pl, www.ecasanniki.pl
観光案内所
住所: ul. Warszawska 142, 電話番号: 24 268 11 08

サンニーキでのプルシャクー族

Leliwa(レリーヴァ)という紋章を持つプルシャクー族はポメラニア(ポーランド語でポモージェ)の出身で、19世紀初期にはマゾフシェ地方でサンニーキやジフリン、シレシンなどの領地、宮殿や館、ワルシャワのマルシャウコフスカ通り(リーシャ通りの向かい)のアパートメントハウスも所有していた。アレクサンデル・プルシャク(1777-1847)はマゾフシェ地方で最も裕福な士族の一人とみなされ、マリアンナ・スカルジスカとの間に3人の子供ートマス、コンスタンティ、アレクサンドラ(愛称オレーシャ)ーがいた。

プルシャク家とショパン家がどういうきっかけで知り合ったのかは定かでないが、親しくなったのはコンスタンティ・プルシャクがワルシャワ高等学校に通っていた頃で、当時彼のフランス語の先生であったミコワイ・ショパンの寄宿舎に自分の家族が留守中滞在していたと考えられる。プルシャク家との付き合いは男性陣だけではなかったことにも触れておくべきだろう。ルドヴィカ・ショパンとコンスタンティの妹オレーシャ・プルシャクもとても仲良くしていたことがわかっている。オレーシャはショパンのピアノ教師歴の中でも初期の生徒の一人だった。ワルシャワのプルシャク邸を訪ねた時や夏休みにサンニーキで一緒に過ごした時に、あまり乗り気ではなかったがレッスンをしていたことが手紙からわかる。またオレーシャに関しては、ショパンが自分の大親友のティトゥス・ヴォイチェホフスキの理想の彼女になるだろうと思っていたことが、手紙に記されている。しかしこのカップルのキューピット役は失敗に終わった。コンスタンティはワルシャワ高等学校卒業後、大学で法律の勉強を始め、その後数年は軍隊で過ごした。11月蜂起に参戦し、貢献者としての最高級勲章ヴィルトゥーティ・ミリタリを受章した。1836年からは相続した製糖業や牧羊に従事した。莫大な資産であったが、徐々に相続遺産は失ってしまった。1852年にコンスタンティは他界し、その6年後息子のアレクサンデルはナタンソン家に製糖工場を売却せざるを得ず、同家は後にサンニーキの資産も買い取った。

! 1925年宮殿の塔の壁に1828年この宮殿にフリデリク・ショパンが滞在していた。と記されたレリーフが埋め込まれた。他にもサンニーキの公園内には青銅のショパン像が2体ある。まずルドヴィカ・クラスコフスカ＝ニッチュ作の像が1985年に設置された。次にバルトウォミエイ・クジェーヤ作の、ピアノの前に座るショパンを楽器の向こうからプルシャク家の家庭教師が見つめている像が2014年に除幕された。

! サンニーキの夏の滞在中、プルシャク家の家庭教師が妊娠したことで、フリデリク・ショパンが疑われた。この一件は後に釈明され嫌疑は晴れ、フリデリクはこの教師の未婚の子の代父となった。

2014年製・フリデリク・ショパンと彼を見つめる家庭教師像

8 プウォツク

…今日プウォツクで何でもいいから僕に何か見つからないか、郵便局全部をひっくり返したんだーとフリデリク・ショパンは1827年7月6日にコヴァレーヴォからワルシャワの家族宛に綴った。
プウォツクはヴィスワ河畔に広がる素晴らしい景観の大きな街で、歴史的にマゾフシェで最も古く重要な街の一つにあたり、中世には公国の首都であった。
1827年7月初めにフリデリク・ショパンはズボインスキ伯と共にグダニスクに向かって出発した。その前に作曲家はプウォツクの近くにある伯爵の領地であるコヴァレーヴォで数

プウォツク大聖堂の扉

日過ごした。そこにはズボインスキ伯の妻と3人の娘家族全員がそろっていた。数日とても美しい邸宅で和やかに過ごし、主に先に控える旅行の仕度をしていた。滞在中にクサヴェリ・ズボインスキはフリデリクをプウォツク観光に連れて行くことにし、自ら街の案内役を務めた。プウォツクの最も古い地区やゴシック建築の時計台と貴族塔のある中世の城

トゥムスキェ丘

壁は訪れたに違いない。ヴィスワ河畔に美しく広がるトゥムスキェ丘にある聖堂やその中の王室礼拝堂にも立ち寄った。そこには1825年にポーランドの2人の支配者の石棺が納められた。ヴワディスワフ・ヘルマンとボレスワフ・クシヴォウストゥニだ。ショパンはヴィスワ河畔に広がる眺めに感嘆した。観光者は鐘楼やベネディクト修道院、ドミニコ修道教会も訪れ、もしかしたらその当時新築されたプウォツク市庁舎にも行ったかもしれない。フリデリクが家族からの手紙を受け取る事になっていた郵便局へも足を運んだ。

トゥムスキェ丘

トゥムスキェ丘は理想的な展望台だ。ヴィスワ河畔の上にあるので、ここから川と向こう岸の全景を見渡すことができる。ここから眺める夕焼けと、橋のイルミネーション点灯はとりわけ素晴らしい。

聖母被昇天大聖堂

プウォツクの大聖堂はヴィスワ河畔のトゥムスキェ丘に聳え立つ。聖堂は1144年に献堂された。何世紀にも渡り増築が繰り返されたが、当時の構造物が現存している。1154年にマクデブルクでプウォツク大聖堂のために作られた、プウォツクの扉と呼ばれる有名なブロンズの複製によって、中央身廊と隔てられている。原物の扉は15世紀からロシア・ノヴゴロドの聖ソフィア大聖堂に設置されているが、その経緯は定かでない。

プウォツク大聖堂

聖堂の北塔には王室礼拝堂がある。その地下にはポーランドの統治者ーヴワディスワフ・ヘルマン、ボレスワフ・クシヴォウストゥニ、そして15人のマゾフシェ公が安置されている。壁はヴワディスワフ・ドラピェフスキ画の多彩な壁画で装飾されている。

ベネディクト修道院とマゾフシェ公城の一部

聖堂の向かいには、ベネディクト修道院と貴族塔と時計塔を伴うマゾフシェ公城の一部が見られる。ここには教区博物館があり、宝庫には14世紀の聖ジグムントの聖遺物や13世紀のコンラット・マゾヴィエツキの聖杯、そしてゴシックの聖体顕示台など、大変価値のある事物が収集されている。聖堂の横の2番目の博物館の建物には考古品や貴族が身につけていた帯が100本近く展示されている。

ナルトヴィチュ広場

ナルトヴィチュ広場（旧称司祭市場）は数多くの古い建物に囲まれている。特に目を引くのは、14世紀から15世紀の変わり目からあるDom pod Trąbami（ドム・ポトゥ・トロンバーミ＝ラッパの家）だ。これはラッパの紋章が掲げられている昔の司祭の家と神学校だ。Dom pod Opatrznością（ドム・ポトゥ・オパチュノシチョン＝摂理の家）にはプウォツク科学協会ジェリンスキー図書館があり、そこには貴重な歴史的価値ある古書が所蔵されており、中には1000年以上前の旧約聖書「知恵の書」のラテン語写本やアダム・ミツキェヴィチ

プウォツクの市街広場

聖母被昇天大聖堂の天井

ュやタデウシュ・コシチューシュコの自筆原稿、また1543年コペルニクス著「天球の回転について」のような珍しい古文書も納められている。図書館にはポーランドで唯一の収集であるフランシスコ・デ・ゴヤの80枚の版画「ロス・カプリーチョス」も見られる。

旧市街広場

プウォツクの広場の賑わいは中世の頃のようだが、それ以外はずいぶんと変わった。昔はここに宿屋、居酒屋や店が並んでいた。真ん中にはゴシック建築塔付きの市庁舎、その前には断頭台があった。現在広場を囲んでいるカミエニーツァと呼ばれる石造の共同タウンハウスは、18世紀末から19世紀初めにかけて建設された。新市庁舎は1820年代に建立されたものが1998年に復元され、周辺も整備された。

聖バルトロマイ教区教会

聖バルトロマイ教区教会の歴史は1356年に遡るが、当時のゴシック建築の建物はもう見当たらない。18世紀に旧市街広場に面して入り口の外壁がバロック様式で増築され、内装は初期バロック様式の祭壇で飾られた。教会の横には12世紀初めの鐘楼がある。

www.turystykaplock.eu
観光案内センター
住所：ul. Stary Rynek 8
電話番号： 24 367 19 44

9 コヴァレーヴォ

お姉ちゃんたちに僕のちっちゃなワルツを送りたかったんだけど、書いてる暇がないんだ、もう乗り込んだから、今、朝の8時なんだけどね。（7時より前に起きることはないし）新鮮な空気で、お日さまはきれいに輝いていて、鳥たちはさえずって、小川はないな、あればうなり声が聞こえるはずなんだけど、でもその代わりに池があってカエルがきれいに合唱してるーとコヴァレーヴォからフリデリク・ショパンは手紙を書いた。

1827年7月6日付
コヴァレーヴォから家族宛のフリデリク・ショパン自筆の手紙

絶景のクサヴェリ・ズボインスキ伯の領地は、1827年夏休みのポメラニア旅行の経由地であった。若いショパンは数日だけだったが、素晴らしく穏やかな雰囲気の中、ズボインスキ伯の身内、妻と3人の幼い娘と共にコヴァレーヴォで過ごした。そのうちの一人のカミラについて手紙の続きに記述している。なんと言っても一番面白いのは、窓際でけたたましくさえずっているクロウタドリで、その次はズボインスキ氏の末娘のカミラちゃん、まだ2歳になってないんだけど、どうも僕のことが気に入ったみたいで「カギラだいちゅきあなただいちゅき」ってたどたどしくおしゃべりするんだ。コヴァレーヴォの領地が19世紀初期にどんな外観だったかはわかっていない。クリスティナ・フィンクが購入した1843年まではズボインスキ家所有であった。現在は1859年以前に当時コヴァレーヴォの地主であったアントニ・ヤブオニスキのために建てられた館だけが荒廃した状態で残っている。その館は、ショパンが1827年に訪問したところと同じ場所に建てられたようだ。

フランチシェク・クサヴェリ・ズボインスキ伯は1795年にコズウォーヴォで生まれた。彼の先祖はズブイノとオッスフカ出身のOgończyk（オゴニチク）という紋章を持つズボインスキー族だ。王の侍従であったヤン・ネポムツェン・ズボインスキとイェジェフスキ家出身のヨアンナの息子で、ポメラニア地方コズウォーヴォの資産相続人であった。コズウォーヴォは一族の大資産でプロイセン王国のシフィエチェ郡に位置した。ズボインスキ伯は他にもコヴァレーヴォ、ループチャ、ジェヴァノーヴォの領主でもあった。1818年11月4日にムワーヴァ郡のラザヌフでローラ紋章のアントニーナ・ニェモイェフスカと結婚し、3人の娘を授かり、ショパンはコヴァレーヴォに滞在中その幼い娘たちに出会った。
ズボインスキ家とショパン家の親密度は、1815年に末娘エミリアの代父に伯爵が依頼された事実に証明されるだろう。後年ズボインスキ伯は国外移住し、1839年にようやく戻ってきた。1840年代には積極的に反体制運動に参加したため、投獄された1853年にシフィエチェで亡くなった。

旧コヴァレーヴォ駅前の菩提樹通り

10シェルプツ

シェルプツはフリデリク・ショパンのマゾフシェ旅行とは関りがない。この土地にショパンが滞在したという裏付けになる説話も文書も存在しない。しかし、ショパンがマゾフシェで生活し作曲していた時代に、この一帯がどんな景色で地元民がどんな生活をしていたのか実際に自分の目で確かめるために、観光者はここに来るべきであろう。シェルプツのマゾフシェ郷土博物館見学は正真正銘の過去への旅で、マゾフシェの田舎独自の歴史と風習を目の当たりにすることができる。

シェルプツ野外博物館の貴族館

野外博物館はシェルピェニーツァ川とスクルヴィ川の合流地点にあり、敷地は60ヘクタール以上の広さだ。展示は茅葺屋根の母屋と厩舎や蔵などの付属舎から成る農家10軒と宿、鍛冶場、桁風車、教会、そして館の集落で構成されている。農場の外観は栄えていた頃の様子を再現している。農家の家財具や農具は持主によって様々だったようだ。裕福な所帯のすぐ隣に最低限の生活必需品のみを備えた貧しい小屋が建っている。家屋の配置は適当になされたものではない。野外博物館では典型的なポーランドの農村集落の配置を再現している。周りに広がる農地がその信憑性を高めている。フリデリク・ショパンがマゾフシェ地方を旅行中には、まさにこんな田舎を通っていたのかと想像することができる。

野外博物館の展示の一部には、庭園と美しい内装も細部にわたって手入れされ、歴史に忠実に再現修復された館の集落もある。17世紀古来の礼拝堂が全体をまとめている。

最近新設された農家を模った展示室には、シェルプツ・マゾフシェ郷土博物館所蔵・民族彫刻コレクション展のある彫刻ギャラリーや、シェルプツ・マゾフシェ郷土博物館所蔵・貴族の交通手段の展示物を見学できる馬車小屋もある。

シェルプツの野外博物館は絶えず増築されており、宿場や鍛冶場、牧師館や数軒の農家など38軒で形成された、これまでとは違う形態の村一路村がまもなく復元される。

シェルプツの博物館は建物だけでなく、界隈にも重要性がある。農家のそばにある手入れの行き届いた菜園や花壇、養蜂箱や動物たちによって、田舎の生活感があふれている。夏期の週末には鍛冶師が働いており、鍛冶屋の前では民俗舞踊団が演奏し、宿屋には食堂や土産物屋がある。屋内は装置が完備しており、内装は四季によって模様替えする。

野外博物館は特別展も企画され、民俗伝統の継承にちなんだコンクールやイベントが開催されている。春には冬と死の象徴であるスラブの女神のマジャンナを模った人形を作って燃やし、川などに沈めて春を迎えるという祭りに参加することができる。復活祭1週間前の

シェルプツ野外博物館の農家

日曜日には敷地内の教会で枝の主日の礼拝が行われ、一番美しい枝を選ぶコンクールもある。お祭りの時には民俗音楽楽団によって生で演奏されている民俗音楽も楽しめる。
シェルプツの中心に建っている古典建築の市庁舎も一見の価値がある。建物はマゾフシェ郷土博物館の所有である。そこでは地元や地方の文化、そして他国の文化広報のための企画展が開催されている。市庁舎では祝祭や民俗伝統行事に関連した青少年のための集いもある。
シェルプツにはいくつか古い教会が見られる。最も古いのはゴシック建築の聖ヴィトゥス・モデストゥス・クレセンティア教会である。この教会の歴史は14世紀か15世紀に遡り、再建後内装はバロック建築で、祭壇にはロココ調の要素がある。教会の壁にはそれ以前のロマネスク様式の聖堂の一部が残っており、地元の説によると自然信仰の神殿の跡に建てられたそうだ。15世紀末のゴシック建築の聖霊教会も興味深い。煉瓦造りで、設計図では長方形であった。仕切りなしに内陣に続く単廊式の教会である。プシャスニシュ出のレンガ職人ヤンと息子のミコワイとピオトルが建設したと言われている。旧市街に建っている。1958年に行われた復興作業の際に発見された、16世紀初めのゴシック風の多彩な壁画が内部を飾っている。

www.sierpc.pl
www.mwmskansen.pl
マゾフシェ郷土博物館
電話番号：24 275 28 83

11 ロシチシェーヴォ

というわけで今日はプウォツク、明日はロシチシェーヴォ、明後日はキクウ、数日トゥーシュノ、数日コズウォーヴォですぐにグダニスク、そして折り返し！ーとフリデリク・ショパンは1827年7月6日、ワルシャワの家族宛の手紙に、休暇旅行の先の予定を書いた。青年はクサヴェリ・ズボインスキ伯のポメラニア旅行

ロシチシェーヴォの館の前のフリデリク・ショパン歓迎シーン

に同伴した。
現在、ショパンがバルト海までたどり着けたかどうか100パーセントの確信はないものの、この手紙のおかげで道中どんな場所を訪ねたのかがわかる。Junosz（ユノシュ）の紋章を持つロシチシェフスキー族の発祥地であるロシチシェーヴォに立ち寄ったことは確かである。当時その村の資産はズボインスキ伯の母

ロシチシェーヴォのショパン記念室

の家系にあたるイェジェフスキ家の所有であった。旅人は美しい庭園に囲まれた後期バロック建築の館に泊まった。この立派な館は18世紀末からの地主であったイェジェフスキ家の依頼で建設された。

ロシチシェーヴォ滞在中にフリデリクは近くの聖ヨセフ教会を訪れた。この教区の歴史は14世紀に遡るが、ショパンが訪れた教会は1779年～1781年に、16世紀末建立の聖堂跡に建設されたものである。教会は館と同様、王冠領軍総監ベネディクト・J・イェジェフスキによって設立された。内部にはバロック様式の講壇など17～18世紀の数多くの貴重な要素が現存しているが、1930年代の増築によって聖堂は現在の形になった。

2つの翼塔を伴った1階建ての18世紀の館はかつてのイェジェフスキー族の居住地で、今日まで残存している。19世紀と20世紀には数回増築された。19世紀末にはほぼ荒廃したが、ここ数年で庭園及び館は再建された。庭園内では新しくできた散歩道を通って、ショパンの訪問を思い浮かばせる古いシナノキやセイヨウカジカエデの木陰を散策し、池のほとりで休憩することができる。改装された館にはロシチシェーヴォ村役場とショパン記念室がある。建物の前には館を訪れたショパンを歓迎する等身大の木製像が立っている。

i

www.rosciszewo.pl
村役場
住所：ul. Armii Krajowej 1
電話番号：24 276 40 76

ロシチシェーヴォの館－現村役場

出版社： マゾフシェ地方観光協会
住所： **ul. Nowy Świat 27/2, 00-029 Warszawa, www.mrot.pl**
電話番号： **22 877 20 10fax: 22 877 22 70**

執筆者： ショパンに関する記述はマリティ・アルバン・ファレスの論説文に基づき、その他はエウロ・ピロット(株)による。

企画構成： レナータ・コネヴェツカ

協力： アダム・ヤシンスキ

学術監修： マルチン・ヴォンソフスキ、国立フリデリク・ショパン研究所

編集監修： マグダレーナ・ヴァルシャク

写真： パヴェウ・ファビヤニスキ、マウゴジャータ・カズル、ヤン・オシェツキ、ヴィオレッタ・シェキェラ、
ワルシャワ大学図書館、エウロ・ピロット(株)、
マゾフシェ地方観光協会、国立
フリデリク・ショパン研究所、ポーランド観光協会

イラスト： ブロフフ教会のイラストはオスカル・ソスノフスキ画

構成及び編集： エウロ・ピロット(株)
住所：ul. Konarskiego 3, 01-355 Warszawa
www.europilot.com.pl

企画協力： マゾフシェ県自治体、マゾフシェフォーラム ポーランド観光景観協会部門、ジェロンカフォーラム自治会、ブク河畔継承財団

特別協力： フリデリク・ショパン　国立研究所

ワルシャワ　2015年　　無料配布無断複製・転用禁止
本書のいかなる部分も出版社の書面による許可なしに複製することはできない。

ガイドブックの重版はマゾフシェ県自治体の補助金による。

「マゾフシェ文化遺産の観光ロード」プロジェクトはマゾフシェ県地域開発プログラム(2007年～2013年、政策6.2観光)の一環としてEU欧州地域開発基金より共同資金援助を受けた。

地方の田舎で生まれ

REGIONAL PROGRAMME
NATIONAL COHESION STRATEGY

Mazovia.
heart of Poland

EUROPEAN UNION
EUROPEAN REGIONAL
DEVELOPMENT FUND

「マゾフシェ文化遺産の観光ロード」プロジェクトはマゾフシェ県地域開発プログラム(2007年～2013年、政策6.2観光)の一環としてEU欧州地域開発基金より共同資金援助を受けた。

www.dziedzictwomazowsza.pl

ガイドブックの改訂および再版はマゾフシェ県自治体財政の補助による。